



Title	AYA世代がんサバイバーの経験とカ ーライフヒストリーを通じた考察ー
Author(s)	日高, 直保
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/87794
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (日 高 直 保)

論文題名

AYA世代がんサバイバーの経験と力
ーライフヒストリーを通じた考察ー

論文内容の要旨

本研究では、4名のAYA世代がんサバイバーにインタビューを行い、得られたデータをもとにライフヒストリーを作成した。そして、作成されたライフヒストリーをふまえ、各インタビュー어의レジリエンスを明らかにすべく考察を行った。さらに、帰納的に導き出された4名のレジリエンスから演繹する形で、AYA世代がんサバイバーのレジリエンスについて検討を加えた。以下に、本研究の概要を記載する。

第1章では、がんサバイバー、およびレジリエンスについて概説を行なった。がんサバイバーとは、がんとともに生きる個人を意味する概念であることを示すと同時に、がんサバイバーをサポートする上で重要とされる、彼らの心理状態に関する研究をレビューした。次いで、がんとともにいかに個人がその人らしく生きるか考える上で、がんサバイバーのレジリエンスを明らかにすることに意義があることを指摘した。そこで、レジリエンス概念に関する概説を行った後、がんサバイバーのレジリエンスに関する先行研究をレビューし、がんサバイバーのレジリエンスとなる要因や、レジリエンスが発揮される過程についての説明が不十分である点を指摘した。

第2章では、本研究で注目するAYA世代がんサバイバーに関する概説を行なった。AYA世代とはAdolescents and Young Adultsの略語であり、15歳～39歳前後の年齢を指す。近年、本邦においても広がりを見せているAYA世代がんサバイバーに関する研究をレビューしながら、AYA世代がんサバイバーに関する情報が現在でも不足している点を指摘し、AYA世代がんサバイバーの経験を、個別性を損なうことなく包括的に描き出すことに意義があるとする主張を行なった。がん罹患する経験が極めて個別性の高いものであることを考慮し、本研究では個人の経験を通時的に記述するライフヒストリー法をもとに、AYA世代がんサバイバーの経験を詳述しながら、そのレジリエンスを明らかにすることを研究の目的として記載した。AYA世代がんサバイバーの経験を詳細に記述することそのものが、AYA世代がんサバイバーのケアに寄与する貴重な情報になると同時に、個人のライフヒストリーをもとに彼らのレジリエンスについて論じることで、がんサバイバーのレジリエンス研究にも新しい知見を付け加えうるとし、本研究の目的を明確化した。

第3章では、本研究の方法論であるライフヒストリー法について説明を行なった。はじめに、ライフヒストリー法の歴史を外観した。その後、本研究におけるライフヒストリーの定義づけを行い、具体的な方法論の提示を行なった。本研究では、個人にとって印象的であったと考えられる出来事や、言及されることの多いキーワードに注目し、個人の経験を時系列的にまとめると同時に、選び出された語りを中心として、言葉の使用法や語られた内容の共通性に注目しながら、個人の在り方を描き出すことを試みた。以上の方法により、個々の出来事とそれに対する個人の思いや行動、そして変化を記述しながら、個人が経験した出来事のつながりと、出来事に向き合う個人の在り方を同時に示し、ライフヒストリーとして提示した。

第4章～第7章では、インタビューで得られた語りをもとに作成した、AYA世代がんサバイバーのライフヒストリーを記載した。1名のライフヒストリーにつき1章を設け、計4名のライフヒストリーを掲載した。

第8章、第9章では、個人のライフヒストリーをもとに、AYA世代がんサバイバーのレジリエンスに関する考察を行なった。第8章では、第4章～第7章に記載したライフヒストリーをもとに、個々人のレジリエンスについて検討を加えた。続く第9章では、導き出された個々人のレジリエンスをふまえ、その共通点を指摘する形で、AYA世代がんサバイバーのレジリエンスとして、経験を意味づける力、病いを引き受け行為する力、他者と繋がる力を挙げ、それらの根底に存在する力として、生き続けようとする力の存在を挙げた。

また本研究では、経験を意味づける力の重要性が述べられたことをふまえ、「人間のレジリエンスとナラティブ」と題した論考を補論として収めた。補論では、経験を意味づける行為、およびそれにより生み出されるナラティブが、人間がレジリエンスを発揮する上で欠かせないものである可能性について言及した。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (日 高 直 保)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教 授	村上 靖彦
	副 査	教 授	山中 浩司
	副 査	学外委員	中岡 成文

論文審査の結果の要旨

日高直保氏の博士号申請論文『AYA世代がんサバイバーの経験とカ-ライフヒストリーを通じた考察-』は若年（AYA世代）では、がんを患いその後寛解した20代から30代のサバイバーのみなさんの聴き取りと分析をもとにして、AYA世代がんサバイバーのレジリエンスについて論じた論文である。

本論文はまず第1章、第2章でがんサバイバーの心理支援やストレスコーピングに関する先行研究を内外にわたって網羅的に検討し、さらにテーマ上の軸であるレジリエンス概念についての先行研究をがんに限らない広い範囲で再検討し、若年世代（AYA世代）のがんについてのレジリエンス研究が欠落していることを指摘している。そのうえで、AYA世代のがんサバイバーに特化した議論の蓄積について文献をレビューし、AYA世代がんサバイバーが個別具体的にどのような経験をしているのか、についての研究が不足していることも指摘して、本論文のリサーチクエスションを正当化している。

第3章で筆者は、方法論について吟味し、とくに桜井厚ややまだようこなど社会学領域で用いられてきたライフヒストリー法に、ジェローム・ブルーナー、森岡正芳を中心とした臨床心理学におけるナラティブ・アプローチを加味している（著者自身が臨床心理士であり、小児から青年期の臨床経験を豊富に持つ）。さらに村上などの現象学的な質的研究に依拠することで、より詳細にインタビューデータを分析することを試みている。

第4章から第7章までは、4人のAYA世代がんサバイバーへのインタビューとその分析に当てられている。脳腫瘍、白血病、横紋筋肉腫、舌がん、とさまざまな部位のがんであり、治療法も苦痛や副作用も大きく異なる。もちろんジェンダーや家庭環境もさまざまである。とはいえそれぞれ就学、進学、就職、ピア活動といった節目となる時期があり、そのなかで病の経験を意味づけ、病の経験をきっかけとしつつ前向きに生活・人生を作っていく様子が描かれている。

高校時代に罹患した脳腫瘍のサバイバーであるAさん（男性）の場合、死の恐怖ではなく放射線や抗がん剤治療の副作用の苦痛をどのように家族がサポートし、あるいは入院生活を少し離れた立場の友人二人がいたことで乗り切る様子、さらにがん経験をもとにして大学院での研究へと経験を生かしていく流れが語られる。

大学時代に白血病に罹患したYさん（女性）は、家族や看護師に支えられた闘病生活のなかで、ユーモアを発揮しながら苦しい治療を切り抜けている。進路を変更し医療職をめざすことになる。

大学時代に横紋筋肉腫に罹患したSさん（男性）は、博士号取得の後に企業就職するとともに熱心に患者会活動を行うというしかたで他の患者たちをサポートする側にまわっていく。

舌がんを患った社会人のOさん（男性）は食べる機能を保存するために切除を拒んで放射線と抗癌剤治療を選択する。ところが副作用で味がわからなくなり、「生きがい」を修正することになり職場での構えが変化している。

語りを詳細に分析した上で、著者は第8章で4人のレジリエンスについて個別に検討していく。さらに第9章ではAYA世代のがんサバイバー一般のレジリエンス概念を構築すべく、経験を意味づける力、病を引受け行為する力、他者とつながる力、生き続けようとする力、とまとめて本論を終える。

補論においてはナラティブに依拠して研究を進めた本論を補強するために、レジリエンスとナラティブの関係について理論的な検討を加えている。

以上のように、本論文はAYA世代のがんサバイバーをめぐる多様な経験を描き出すとともに、彼らがもっている（著者が「レジリエンス」と名付けた）力がどのようなものか、そして意外にも研究協力者の皆さんはほとんど死

の不安を語らなかったこと、それとは別の所（治療の苦痛、社会的な孤立）が大きな困難になっているということなどを示した。これらの側面は先行研究では知られていなかった本論文独自の成果であり、博士（人間科学）の授与にふさわしい内容だったと判断できる。